ふ

国語問題

（解答番号　1～30）

はじめに裏返して、表紙の注意事項を必ず読みなさい。

1. 「国語」の問題は18ページあります。
2. 「数学Ⅲ・数学C」の問題は反対の面にあります。

(一) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

多様な都市の風景のなかでも、やはり多くの建築がずらりと群れそろった華麗な姿は、人の目を引く。街路や広場あるいは水面などを隔てた向う側に、軒を接して居並ぶ建築は、それぞれが個性を表わしながら、同時に、相隣(あいとな)る建築との関係においても生きているように見える。つまり、壁面のテクスチュアや形態がつくり出す一個の建築としての自己主張と、群れのなかの協調的関係という、この矛盾する両者の緊張関係が風景の基調を奏でている。古典から現代まで都市風景を通奏してきたこの旋律は、時代と文化による表現の差はあるにしても、「 X 」をもってその原理としてきたのである。

古典的街並においては、制度的規制もそうとう厳しかったが、材料も構法も、伝統という無名のプランナーの厳格な総合管理によって、ファサードの調子から色調にいたるまで、すべてが巧まずして協調的関係におかれていた。協調的な風景文脈に身をゆだねるうちに、めいめいの建築が個性を発揮する素材と機会を見出す、というかたちになっている。

都市風景の魅力の基本は、やはり、他者との協調的共存の姿にあるわけで、それがしだいに自覚され、近代都市に見あう規制が制度化されてきたわけである。建物の高さやファサードなどが勝手放縦な風景には少しも都市的品格が感じられない。都市計画的規制は、建築表現の自由をしばる一面があるのは確かだが、[1]表現ということの非人称的次元について、もう少し思いをめぐらす必要がありはしないであろうか。風景のなかに身をおく建築の理想の個性とは、他をひき立たせる仕方の個性であって、自己主張とは異なる。

個としての建築が他者との協調という姿を表わすもう一つの形は、街路との関係である。街路という共同体の財産に対して建築が示す構えが都市風景の魅力を大きく左右する。いっせいに揃った建築の高さと街路の幅のあいだに適当な比例関係を保っておくという古典的習慣は、空間の適度なまとまりを生み出すという釣合い感覚と環境的配慮が根拠になっていたが、その結果、都市的な絆(きずな)と共存の約束をテーマとする風景が成立していたのである。

ヨーロッパの都市では小広場に面した建築壁面に彫刻や噴水をあしらい、邸宅の外壁に宗教的彫像を刳(く)りこんだりする例を見

かけるが、こうしたところに都市の風景の大事なポイントがある。つまり、建築という私的領域と、街路という共有の領域との接触部分のあしらい方に、共同体風景の可能性が潜んでいる。

わが国でも、伝統的街並では、公道に面した民家の軒下におもしろいディテールが見られる。軒下のたたき、格子戸、くくりつけの縁台、柵等々。私的領域と公的領域の間合に刻みつけられた共同の絆の造形である。それは、個の建築を都市の共同体のなかにしっかりと投錨させる装置である。学校、役場、駅など、さまざまな公共建築を、並木道の行きどまりや広場、水辺などの、建物うつりのよい格別の場所におさめるのも、共同体へ帰依する精神の造形表現なのである。この風景的発想が、街づくりの不易の常識といえよう。とくに公共的建築の場合は、土地さえ入手できればどこにつくってもよいというものではない。

都市は、たがいに十分気心も知れず素性も定かでない人びとが集まるところである。土から離れ、自由に活動しようとする人びとが、さまざまな想いを抱いて暮らしている。都市は、そのことを前提としながら、めいめいの理想追求の自由を保証し、快適に暮らしてゆくためのルールによって成立している。農村に見られるような、私的領域に対する相互の暗黙の諒解は存在しないから、最低限、たがいに敵意のないことは明確に表現しておかなければならない。

したがって、見知らぬ人どうしの挨拶が都市的に洗練された作法になるのは当然のことであろう。この作法が都市空間における造形的表現にも反映されていく。古くから都市共同体が営まれている町では、この作法がよく発達し、信じられている。民家の窓辺や軒下に花を置くならわしは、ヨーロッパでは広く行きわたっていて、ときには半ば法的強制力さえ持つが、こうした風景に接すると、何かしら、挨拶を受けたように感じられる。わが国でも、門前の路地を掃き清めたり水を打ったりする風習は、これに相当するのであろう。いまではこの慣習はしだいに消えつつあるが、正月に門松を飾る風習にその名残りが見られる。

都市の風景という課題のなかでは瑣末なことのように見えるかもしれないが、都市風景の基本に「挨拶」という性格を確認することは、重要なことであると思う。民家の飾りつけは、そうした都市的精神のいわば雛形であって、城の天守閣などはさしずめよそ者へ向けた町ぐるみの挨拶の風景であり、町の顔である。[2] 汽車の窓辺から、町の名とともにある城の天守閣が、林立していくビルかげにうすれてゆくのを見るのは、さみしい。人間どうしの付き合いで人を最後に動かすのは相手の顔の表情である。都

市と人の付き合いにおいても同じことだといえないであろうか。

不特定多数の道行く人々に積極的に語りかけねばならない商家の場合には、挨拶の必要がことさら大きく、看板が発達するのも当然である。

伝統的社会において使用されていた看板には、商品の姿が巧みに象(かたど)られていたりする。あるいは看板に能書家の揮毫(きごう)を求めることもよくおこなわれた。越後の良寛が酒代かわりに看板書きをしたことはよく知られている。能書家で篆刻(てんこく)の名人でもあった北大路魯山人も、看板書きがふり出しで、このような実用的な書のほうが、個人の芸術的書よりも美しいという考えを持っていた。柳宗悦もまたそうであった。この思想は生活景を美しくしようとするわたしたちに一筋の光明を与えてくれる。

商店看板の祖形は単なる情報板というよりも、一定の型式を備えた人間的な身振りの優雅さをもっていた。それは優雅な挨拶といってもよいものであった。勝手気ままな看板の氾濫(はんらん)は、喧騒(けんそう)と自己主張の横溢(おういつ)でしかない。およそ、勝手に挨拶の流儀を発明するというようなことは、人の世では考えられないわけで、これは都市風景でも同じことなのである。

商業看板や店構えは、挨拶としての節度を大切にするとともに一定の様式的約束の枠をはめられてこそ公的な性格が与えられ、都市風景のなかにあやうげなくおさまる。関係者がみな一定の約束に従っている姿自体が一つの都市的風景をつくる、という点に注意する必要があろうと思う。

生活様式の複雑化にともない、都市にはさまざまな管理施設が欠かせないが、これがまた、風景上見過ごしにできない問題をはらんでいる。なかでも、立ち入り防止や安全管理の施設が最も目につきやすい。

まず第一にあげられるのは、民家の塀であろう。塀や門には、人の巣の風景に特有の奥ゆかしい含みが凝縮されている。邸宅の縁辺をとりまく、いわば瑣末な構築物の造形に、有名無名の日本人が注いできた莫大(ばくだい)な精神的エネルギーを考えてみるとよい。塀とは、立ち入りの謝絶という意味をはるかに超えた象徴的価値を担っていたはずである。これを単に立ち入りを防止する物理的障害物と早合点したとき、住宅地の風景は急激に崩壊し始めたのである。

立ち入りを謝絶するということには、挨拶の含みが内在している。柵や塀のような構築物を粗末にあしらうと、無愛想の感を

禁じえないのは、こうした理由によるものと思われる。

歩道と車道の境界におかれるガードレールなども同様のニュアンスをもっている。ガードレールは、元来、自動車専用道路で使われる道具で、広々とした空間を高速で移動する視点から見るかぎりは、むだのない簡潔な形をしているが、歩行者の空間とはとり合わせがわるくなり、たちまち、無神経で無愛想な代物に変容してしまう。ガードレールは、施工精度もあまり高いものではなく、衝突のさいに変形することを前提にしているから、管理がわるいと、じつにがさつなありさまになってしまう。[3]ガードレールは、流れるような連続的な形に特徴があるはずだが、都市内では民家への頻繁な出入口のために寸断されることになり、しかもその末端の景観的処理に困難があって、それがいたる所に現われると、始末のしようがなくなる。建築物の単位が小さいために出入口の数も多くなるわけで、ガードレールのある街路は、じつに日本の都市の苦渋をまのあたりに見る思いである。急激なモータリゼーションと歩道の狭さとが、こういう苦しい解決方法を余儀なくさせる原因になっているが、各国とも、じつにさまざまな都市造形上の工夫を注いでいるのである。照明柱なども、自動車道路用のものとまったく同じ形が歩道へ不用意にもちこまれている例が多いが、歩道の寸法と人体の表情にふさわしいデザインが必要と思う。

およそ人間が使う道具は、とり合わせと場所と時機を得ることが肝要である。床飾りの花や軸物、服装、家具、食器などの生活の道具は、とり合わせと歳時記的約束事によって、[4]「物」によることばの体系をつくってきた。都市の美的体験には、暗々裏に結ばれたこの約束の感覚がひそんでいる。この約束が守られている生活景には、唐突で人を驚かしたり不安におとしいれるようなところがない。何かあたりまえで安心しきっていられるような、紋切り型といってもよいような、寡黙な道具立てが、ただそろっているだけである。それが生活景の美しさの基本である。都市風景の混乱は、[5]この沈黙の禁が侵されているという感覚に通じている。

看板に多用されている赤や黄色などは、特別の社会的信号のために留保しておくべきではなかったか。あるいは、街路樹の種類は、様式上もある約束をふくむものではなかったであろうか。新しい都市生活の間尺（ましゃく）に合った秩序を発見し、積み重ねて、

永続的な型と約束にまで高める努力が、どうしても必要であろう。こう考えてくると、共同体の風景の底には、やはり社会生活を営む人間の[6]倫理的構えが透けて見えるのに気づく。

（中村良夫『風景学入門』による）

注

テクスチュア……ここでは素材や工法によって生み出された材質感

ファサード……建築物の正面

北大路魯山人（きたおおじ　ろさんじん）……一八八三―一九五九　書家・篆刻家・陶芸家・美食家

柳宗悦（やなぎ　むねよし）……一八八九―一九六一　民芸運動の中心となった美学者・思想家

問一　空欄 X に当てはまる言葉として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 1 。

A　不即不離　　B　以心伝心　　C　和して同ぜず　　D　敬して遠ざく

問二　傍線1「表現ということの非人称的次元」とはどのような「次元」か。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 2 。

A　現世的な次元ではない超越的な次元

B　人間的な次元ではない無機的な次元

C　個人的な次元ではない普遍的な次元

D　個性的な次元ではない公共的な次元

問三　傍線2「汽車の窓辺から、町の名とともにある城の天守閣が、林立していくビルかげにうすれてゆくのを見るのは、さみしい」とはどのような「さみしさ」か。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 3 。

A　町の象徴的建築物が平凡な風景に同一化していくさみしさ
B　町の懐かしい建築物が汽車の窓から遠ざかっていくさみしさ
C　町の顔と感じられる建築物がその存在感を失っていくさみしさ
D　町の代表的な建築物が都市改造のなかで破壊されていくさみしさ

問四　傍線3「ガードレールは、流れるような連続的な形に特徴がある」のはなぜか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 4 。

A　高速で移動する車を対象とした施工物であるから
B　機能的な社会にこそふさわしい施工物であるから
C　近代的なデザインによって実現した施工物であるから
D　都市造形上の工夫が十分になされた施工物であるから

問五　傍線4「「物」によることばの体系」とはどのような「体系」か。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 5 。

A　その「物」がそれ自体として持っている寡黙ながら闊達で自由自在な表現の体系
B　その「物」がそれぞれに持っている歳時記的約束事に沿った鮮やかな表現の体系
C　その「物」が一定の決まりに従ってとり合わせられ使用されるという表現の体系
D　その「物」が持っている固有の価値観によって使い分けられるという表現の体系

問六　傍線5「この沈黙の禁が侵されている」とあるが、この「禁」とはどのようなことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 6 。

A　都市の「生活景」は平凡な紋切り型をめざし創造性を強調してはならないということ
B　都市の「生活景」は物の配合の具合や季節との適合性を失ってはならないということ
C　都市の「生活景」はそれにふさわしい機能的な美しさをなくしてはならないということ
D　都市の「生活景」は安全性を脅かすような刺激的な物を配置してはならないということ

問七　傍線6「倫理的構え」とはどのようなことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 7 。

A　個性を保ちつつも他者と協調しようとすること
B　共同体にひたすら懸命に帰依しようとすること
C　都市的な洗練された作法を順守しようとすること
D　理想を追求する自由を特に尊重しようとすること

問八　次の中から本文の内容と合致しないものを一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 8 。

A　景観の伝統は損なわれることなく守り続けられるべきものである。
B　景観構成の重要点の一つは共有的領域と私的領域の接触点にある。
C　景観は無機的な対象物としてではなく人とのかかわりのなかにある。
D　景観は機能的な意味を超え優れて象徴的な意味をはらむものである。

問九　本文の性格として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 9 。

A　具体的な事実を通して対象を客観的に捉えた説明的文章

B　具体的な事例を基として自己の感想を語った随筆的文章

C　具体的な事実を指摘して問題点の所在を述べた報告的文章

D　具体的な事例を挙げて対象を考察し見解を述べた評論的文章

(二) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

歌をうたうことは、ほとんどすべての社会で見出される。喜びや悲しみ、怒りや絶望、労働の楽しみや辛さ、祈りや希望、美しい風景や忘れえぬ出来事、さまざまな感情や出来事を、人間の社会は言葉をリズムとメロディに乗せた「歌」という形で表現し、うたい、伝承してきた。だが、ここで考えたいのは歌という表現の［X］性についてではない。人が歌をうたうとき、そこでうたっているのは誰なのか？　歌の言葉はいったい誰の言葉なのかということを、ここでは考えてみたいのである。

歌の言葉は誰のものなのだろうか？

歌を作った人のものだろうか？

多くの場合私たちは、自分で作ったのではなく他人の手になる歌をうたう。にもかかわらず私たちは、しばしばそうした歌を、私の心情を表現する私自身の言葉のように、[1]文字どおり〝私の歌〟としてうたうことがある。その言葉が私の現在の状況や心情と重なりあうものではないにもかかわらず、その歌をうたうことでそうした状況や心情をまさに我がことのように感じ、うたうこともある。自分自身でうたわなくとも、誰かがうたう歌を、まさに私の気持ちを表わしたものであるかのように聴き、ときに涙することもある。自分の中で言葉にならず、形を与えられなかった感情が、ある歌の中に見出されてしまうこともある。独りではなく複数の人間とともに同じ歌をうたい、あるいは聴くとき、それによって、場合によってはそれまで見も知らぬ他人であった人びととの間で、同じ歌の言葉が「私たちの言葉」であるかのように響くこともある。こうしたとき、歌の言葉は他人の言葉であると同時に私の言葉や私たちの言葉として、ときに私自身が自ら発する言葉よりもはるかに私の心と共鳴し、自他の間を流れ、結ぶものとしてうたわれ、聴かれるのである。

優れた歌い手とは、他人の言葉を我が言葉としてうたい、聴く者にもその歌を、まさに我が歌として聴かせることができる者のことだろう。そのとき、うたっているのはその歌い手なのだろうか？　それとも歌が、歌い手の口を借りてうたっているのだろうか？

そもそも民衆の間に伝承されてきた歌は、特定の誰かに帰属する言葉ではなく、その歌をうたいついできた人びとの集団に帰属する言葉である。このことは、多くの人びとに聴かれ、口ずさまれる今日の流行歌についても言える。なるほど、現代の流行歌には作詞者や作曲者、特定の歌い手があり、彼らの権利はチョ①作権によって守られている。その意味では現代の歌は法権利上、作詞者と作曲者と歌い手のものだと言える。だがしかし、その歌が多くの人びとによって〝私の歌〟や〝私たちの歌〟として聴かれ、うたわれるとき、その歌の言葉は、法権利上はともかく歌をうたう営みにおいては、それを聴き、うたう個々の人びとの、そして彼らのあつまりとしての大衆のものになっている。ある歌をうたい、共有することを通じて人は、共時的な、そして通時的な広がりの中で他の人びとともにある関係を生きるのだ。

きわめて個人的な気持ちや思いをうたう歌が、多くの人の心を捉え、口ずさまれるものにもなりうる。そしてまた、私を超えた「我われ」の言葉としての歌の言葉が、私の口を通じて「我われの歌」としてうたわれることもある。だからこそ、ある歌をともにうたわされることが、私の意に染まない「我われ」へと私たちをドウ②員するために利用されることもある。

歌の言葉は私たちの外側にあると同時に、私たちの内側にある。それは他人が作った言葉として私たちの外側からやってきて、私たちの中に入り込み、私たちの心情と共鳴し、私たちの言葉としてうたわれる。

私が歌の作り手で、私自身が作った歌をうたう場合でも、このことは変わらない。なぜなら、私が自分の歌を作るその言葉は、私が自分で作り出した言葉ではなく、かつて私がその中に赤ん坊として産み落とされ、他人たちが話すのを聞いて覚え、習得していった「他者の言葉」であるからだ。私が作る歌の言葉は、かつて私が聞いた言葉の群れから選び出される。そしてそれは、聞き手の中で、聞き手がかつて聞いたさまざまな言葉の群れと共振し、共鳴する言葉として聞かれるだろう。個々の歌は、その歌が作られる言語の大海の中に浮かんだ島、あるいは共時的、通時的に広がる「私たちの言葉」の大地の上に芽生え、花開いた草木のようなものだ。そして歌をうたい、また聴く人びともまた、そうした言語の大海に浸かり、大地に根を張ってその歌をうたい、聴く。

だから歌を聴き、うたうとき、人は歌の経験を通じて社会を生きている。歌とは、そのような生きられる社会の経験である。

歌をうたうとき、私たちは他者たちの言葉を我が言葉、我らが言葉としてうたうのであり、そうした歌の言葉によって「うたう私」や「うたう我ら」になり、歌の経験を他者とともにある関係として生きる。それは別の言い方をすれば、[2]歌にうたわれることによって「うたう私」「うたう我ら」として他者たちとともにある関係を生きるということである。このとき人は、歌に対して能動的であると同時に受動的である。人は歌によって感情や出来事を表現し、伝達するが、同時にまた歌によってある感情や出来事を我がものとしてうたわされ、生きさせられるのだ。

このことは、けれども歌だけにあてはまるのではない。それは言葉一般に、私たちが話し、語り、読み、そして考えること全般について言えることだ。

私たちは言葉を話す主体であると同時に、言葉によって話しかけられる客体であり、言葉を話させられる媒体なのだ。ここで「媒体」というのは、歌の言葉のように私の外側から来た言葉が、私を通じてうたわれるようなあり方のことを意味している。たとえば社会学者としての私は、社会学の言葉を自ら語る主体であるけれども、それはまた、私を通じて社会学の言葉がしゃべっているということでもある。これを「憑イ」[③]と呼んでもよいだろう。ある言葉を語るとは、ある言葉が語り手にとり憑いて、その言葉を語る巫者（ふしゃ）や霊媒のような存在にすることだ。英語で「媒体」を意味するmediumには「霊媒」という意味もある。神や精霊、あるいは死者に憑かれた巫者や霊媒は、まさにとり憑いた神や精霊や死者となってその口から語るのである。

すでに言語のある世界の中に生み出されるという意味では、[3]言語は私たちに先立って存在するが、個々人の成育に即して言えば、言語は私たちの身体に後から宿り、身体と身体の関係を仲立ちする特定の場としての「［　Y　］」、おしゃべりやお話や物語や小説や、その他さまざまな言葉の世界を形作ってゆく。語り継がれる言葉を基点にして考えると、私たちの身体は言語が宿り、それを通じて語るという意味で言語にとっての媒体だが、私たちの身体を基点として考えるならば、言語は身体間の関係を媒カイ[④]し、身体と身体の間の働きかけや、身体と世界との関係に多様な意味を与え、複雑化してゆく媒体なのだ。言語は私たちの中にあると同時に、私たちの間にあって、私たちの生きる世界を形作るのである。

（若林幹夫「うたっているのは誰？」による）

問一　①～④のカタカナの部分の漢字と同じ漢字を含むものを、それぞれの群から一つずつ選び、その符号をマークせよ。解答番号は①が 10 、②が 11 、③が 12 、④が 13 。

① チョ作権　A チョ蓄をする　B チョ名な作家になる　C 情チョが安定する　D チョ突猛進する

② ドウ員　A ドウ盟を結ぶ　B ドウ入部分を書く　C 鍾乳ドウを訪れる　D ドウ機を語る

③ 憑イ　A 講演をイ頼する　B 死者をイ霊する　C 核兵器のイ力を感じる　D 仕事をイ嘱する

④ 媒カイ　A 大海をカイ遊する　B 事件にカイ入する　C 仕事をカイ雇される　D カイ速電車に乗る

問二　空欄 X に当てはまる言葉として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 14 。

A 個別　B 全体　C 特殊　D 普遍

問三　傍線1「文字どおり」と同じ意味になる四字熟語を次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 15 。

A 異口同音　B 徹頭徹尾　C 正真正銘　D 一字一句

問四　傍線2「歌にうたわれる」とあるが、そのような状態にあるものを、筆者は何と言っているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 16 。

A 主体　B 客体　C 霊媒　D 精霊

問五　傍線3「言語は私たちに先立って存在する」とあるが、「私たちに先立って存在する」言語の状態を、筆者はどのような比喩で説明しているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 17 。

A　島　　B　大地　　C　草木　　D　根

問六　空欄 Y に当てはまる言葉として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 18 。

A　言語的シンボルの世界　　B　言語的ダイナミズムの世界

C　言語的フィクションの世界　　D　言語的コミュニケーションの世界

問七　この文章の表題は「うたっているのは誰？」であるが、筆者は歌を「うたっている」のは「誰」であると述べているか。その説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 19 。

A　「私」であると同時に、「私たち」であり、また「他者」でもある。

B　「私」であるが、ある時は「私たち」であり、また「他者」でもある。

C　「私」ではなく、「私たち」であり、また「他者」でもある。

D　「私」ではなく、また「私たち」でもなく、「他者」である。

(三) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

今は昔、在原業平中将と云ふ人有りけり。世の［ X ］者にてなむ有りける。しかるに、身を要無き者に思ひなして、「京には居らじ」と思ひとりて、「東の方に住むべき所や有る」とて行きけり。[1]本より得意と有りける人、一両人を伴なひて、道知れる人も無くて、迷ひ行きけり。

しかる間、参河の国に八橋と云ふ所に至りぬ。そこを八橋と云ひける様は、河の水出でて、蛛手なりければ、橋を八つ渡しけるに依りて、八橋とは云ひけるなり。その沢の辺に木隠の有りける、業平下り居て餉食ひけるに、小河の辺に[2]劇草おもしろく栄きたりけるを見て、具したりける人々の云はく、「劇草と云ふ五文字を、句の頭毎に居ゑて、旅の心の和歌を読め」と云ひければ、業平かく読みけり。

からころもきつつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞおもふ

と。人々これを聞きて、哀れに思ひて泣きにけり。[3]餉の上に涙落ちてほとびにけり。

そこを立ちて眇々と行き行きて、駿河の国に至りぬ。うつの山と云ふ山に入らむとするに、我が入らむとする道はいと暗し、心細き事限り無し。絡石・鶏冠木繁りて物哀れなり。「かくすずろなる事を見る事」と思ふ程に、一人の修行の僧会ひたり。これを見れば、京にて見知りたる人なりけり。僧、業平を見て、奇異に思ひて云はく、「かかる道をば何で御座すぞ」と。業平、そこに下り居て、京に、その人の許に文を書きて付く。

するがなるうつの山べのうつつにもゆめにも[4]人にあはぬなりけり

と。そこより行き行き、富士の山を見れば、五月[5]の晦日に、雪いと高く降りたるに、白く見ゆ。それを見て、業平かく読みけり。

ときしらぬ山はふじのね[6]いつとてかかのこまだらにゆきのふるらむ

と。その山はここに譬[7]へば、比叡の山を廿重ね上げたるばかりの山なり。なりはしほじりの様にぞ有る。

なほ行き行きて、武蔵の国と下総の国との中に、大きなる河有り。それを角田河と云ふ。その河の辺にうち群れ居て思ひ遣れば、「限り無く遠く来にけるかな」と侘び思へるに、渡守、「早く船に乗れ、日暮れぬ」と云へば、乗りて渡らむとする程に、皆人、京に思ふ人無きにしもあらで、侘び思ひけり。しかる間、水の上に、鴫の大きさ有る白き鳥の[8]脚と足とは赤き、遊びつつ魚を食ふ。京にはさらに見えぬ鳥なれば、人も見知らず。渡守に、「彼は何鳥とか云ふ」と問へば、渡守、「彼をば都鳥と云ふ」と云ひければ、業平、これを聞きてかくなむ読みける。

なにしおはばいざことはむ都どりわがおもふひとはありやなしやと

船の人、皆これを聞きて挙[9]りてなむ泣きける。

この業平はかやうにして和歌をいみじく読みけるとなむ語り伝へたるとや。

注

餉……旅行用の干した飯

問一　傍線1「本より得意と有りける人」とはどのような人か。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 20 。

A　もとから和歌の上手な人
B　もとから仲のよかった人
C　もとから得意げにしている人
D　もとから旅の意味がわかっている人

問二　傍線2「劇草」の読みとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 21 。

A　あやめぐさ　　B　をみなへし　　C　かきつばた　　D　からころも

問三　傍線3「餉の上に涙落ちてほとびにけり」はどのような表現と考えられるか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 22 。

A　餉が涙でふやけるほどに人々が泣いたことの誇張表現
B　餉が涙でしめるほど人々が思い屈したことの婉曲表現
C　餉が涙で塩気を帯びてしまったことの比喩表現
D　餉が涙でだめになってしまったことの強調表現

問四　傍線4「人」と同じ「人」と考えられるものとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 23 。

A　本より得意と有りける人
B　具したりける人々
C　京にて見知りたる人
D　京に思ふ人

問五　傍線5「五月」は季節で言えばいつになるか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 24 。

A　仲春　　B　晩春　　C　初夏　　D　仲夏

問六　傍線6「いつとてか」の口語訳として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 25 。

A　いつになってか
B　いつと思ってか
C　いつであったか
D　いつと言ったか

問七　傍線7「ここ」とはどこのことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 26 。

A　京　　B　東の方　　C　参河の国　　D　駿河の国

問八　傍線8「の」の用法の説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 27 。

A　主語を示す　　B　同格を示す　　C　連体修飾語を作る　　D　形式名詞を作る

問九　傍線9「挙りてなむ泣きける」のはなぜか。その直接的な理由にあたる本文として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 28 。

A　その河の辺にうち群れ居て思ひ遣れば

B　「限り無く遠く来にけるかな」と侘び思へる

C　京に思ふ人無きにしもあらで

D　京にはさらに見えぬ鳥なれば、人も見知らず

問十　空欄 X は本文自体の欠損箇所であるが、本文全体との関連から考えて語句を補う場合、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 29 。

A　切れ　　B　侘び　　C　有り　　D　好き

問十一　本文の出典を次の中から選び、その符号をマークせよ。解答番号は 30 。

A　大和物語　　B　伊勢物語　　C　今昔物語集　　D　古今著聞集